

流 れ

初代会長 遠 藤 文 雄



10年ひと昔、早いものである。清瀬の片田舎でうぶ声をあげた赤んぼうも、ハイハイ、おすわり、よちよち歩きを経て今や小学生になったことになる。元気な小学生か、たよりない小学生かの評価はともかく生きてきた歴史の重みに逆うすべはない。

思い起こせば日本のリハビリテーションの黎明期にあって生みの苦しみともいえる陣痛のあったことを忘れ得ない。41年春協会設立準備委員会は学院の卒業生とすでにこの職域で働いていた有志によって持たれ、副学院長の小林先生をまじえ、学院や肢体不自由児協会で数回にわたり

会合を持ったのである。準備委員会の主旨にのっとり、第1回の国家試験の合格発表を待って設立趣意書を全合格者に発送し、設立総会は5月、古ぼけた清瀬の看護学院講堂で行った。80余名の賛同者が集まり熱気みなぎるうちに総会は終了し、思いがけなくも若輩者の小生が会長に選出されるはめになった。保田、岩本の両先輩を副会長にお願いして、東京、大阪を中心としたブロック構想がうちたてられ、組織作りと入会をうながしたのである。この会員獲得をめぐる病院マッサージ協会（現全国病院理学療法協会）にはずいぶん迷惑をかけたようである。その後は国家試験の合格者には当協会の案内状を発送するにとどめ無理な勧誘はいっさい行わなかったのである。41年10月には東大において臨時総会、第1回学会というよりは研修会を開くまでになり、定款が出来、WCPPT加盟のための代表派遣の件や協会機関誌に関する件が論議された。

当時のことを思い出すと楽しいことは一つもなく、皆がやたらと苦勞していたように思う、私は当時神奈川県七沢病院に勤務していたので（1年生）、事務局のある清瀬まではるばる通ったものである。月給は交通費でなくなってしまう何年かが続いたのである。

当初かかげた目標は会員諸氏の努力により組織はブロックから県単位におちつき、念願のWCPPT加盟と社団法人の認可がなされ、協会機関誌の発行をみ、経過措置における特別法も打ち切れ、当協会の土台は安定したと考えられる。ここに至るまで長い長い歴史の1コマ1コマを作りあげてきた先達の努力に、あらためて感謝と敬意を表するとともに、日本の風土になじむべくリハビリテーションの原点を見出し発展させることが当協会のあるべき姿と思う。最後に、協会の限りなき発展と会員諸氏の健康を祈ります。